神西清全集

第六卷

神西清全集・第六巻　昭和五十一年一月末日
第一刷刊行
印刷所東京都文京区小石川一丁目五番地　猪瀬印刷株式會社
製本所東京都千代田区麹町三丁目十二番地　吉原製本株式會社
發行所東京都文京区大塚二丁目十四番地　文治堂書店
頒價　六阡圓

目

次

Ⅰ
詩と小説のあひだ　一　三五
散文の運命　三　六六
Ⅱ
国語の行手　七五　九三
簡体字をつくれ　八〇　九八
国語の変革　八三　一〇二
言葉をかへりみる時　八四　一〇八
断罪と再出発　九一　一二
＊
Ⅲ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

劇評の生理衛生　一一七
ふしぎな嗅覚　一三三
新劇の劇場と〝無償の善意〟　一三三
愚劇十番　一三五
作家と演劇　一三〇
一九五四年新劇の動向　一三三

IV

鏡ノ王女　一三九
万葉遊歩　一四五
記紀の恋愛歌謡　一五〇
軽の蓮池　一五三

V

二葉亭四迷　一六三
二葉亭の飜訳態度　一七五
不滅の訳業　一七七
樋口一葉　一七七
樋口一葉―一女性の生態　一七七
島崎藤村　一八七
『新生』について　一八九
『藤村詩選』　一九八
森鷗外　一九八
鷗外の文体について　二〇二
泉鏡花　二〇三
鏡花風土記抄

『婦系図』　二〇七
鏡花とメリメ　二〇九
永井荷風
書災のことなど　二一三
荷風に於ける詩の宿命　二一八
北原白秋
『北原白秋詩集』　二二三
有島生馬
『海村』から　二二八
文人有島生馬　二二九
芥川龍之介
『芥川龍之介文庫』　二四二
宇野浩二
小説家の眼　二六三
折口信夫
迢空先生の文学　二六六
種々無限　二六九
岸田国士
歎きの喜劇　二七三
『落葉日記』　二七四
『どん底』と岸田国士　二七七
岸田先生の死　二八一
痛哭　二八六
弔辞　二八七
井伏鱒二
『頓生菩提』　二八九
川端康成
川端康成氏の近業　二九二
深田久弥
北方の骨骼　二九六
堀辰雄
瑪瑙を切る　二九九
『物語の女』　三〇三
『聖家族』署名まで　三〇四

一人一評　三〇六
狐の手套は……　三〇八
『風立ちぬ』　竹中　郁
水を聴きつつ　三一〇
創造と修補　『署名』について
堀辰雄への手紙　三一三
病床の友への手紙　立原道造
高原の人　三一五
静かな強さ　鹿の記憶など
大和路・信濃路　三二三
白い花　辻野久憲
年少のころ　三二三
＊　きれぎれの追憶
堀辰雄文学入門　三二四
堀辰雄の作品について　石川　淳
堀辰雄ベスト・スリー　三二九
『牧歌』　石川淳とヴァレリイ
三三三
『焼跡のイエス』
三三三
『処女懐胎』
三三五
丹羽文雄
『哭壁』をめぐつて
三三七
『慾の果て』
三三四
火野葦平
三三六
火野さんの文学
三三八
太宰　治
三九一
三九六
四〇一
四〇五
四〇八
四一五
四一八
四二三
四二一
四三七

斜陽の問題　四六
ロマネスクへの脱出　四五八
武田泰淳
『武田泰淳作品集』　四六七
『美貌の信徒』　四七〇
井上靖
『ある偽作家の生涯』　四七五
三島由紀夫
仮面と告白と
ナルシシスムの運命　四七九
期待と杞憂　四八二
田宮虎彦
『ある女の生涯』　四九四
梅崎春生
『ボロ家の春秋』　五〇〇
椎名麟三
『神の道化師』　五〇五
小島信夫
『アメリカン・スクール、殉教』　五一〇
福田恆存
『龍を撫でた男』の面白さ　五一五
中村真一郎
真一郎といふ人　五二一
福永武彦
『風土』　五二三
神西清年譜　五二八
神西清著書目録　五二一
神西清飜訳書目一覧　五二四　五二六

神西清全集　第六巻

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

I

詩と小説のあひだ
——読書日記抄

某月某日

このごろは妙に詩に飢ゑてゐる。わたしはあまり都会へ出ない。昔は別荘地であつたこの小さな町の奥に引込んでゐれば、焼跡の復興のさまも目にふれることがない。花木の多いこの庭には、緋桃や真白な梨の花の散つたあとに、そろそろ紫木蓮や牡丹が、支那風の美しい花鳥図をくり展げようとしてゐる。去年の今ごろは、庭の面を泳ぐやうに流れ過ぎる、おびただしい野禽の群ばかり目について、花の色はつひぞ目に入らなかつた。今年は、目にはどうやら入りながら、それが心にまで沁みて来ない。やはり、心が荒廃してゐるのである。来年は果してどうであらうか。……疑ひもなくわたしたちは、記念すべき過渡期に生きてゐるのだ。

先日も、高輪の台上に立つて、ふと一休宗純が応仁文明の乱中に詠んだ詩のうちの「廃址　日は瘠せて　秋の興に似たり。春風桃李　たそがれ易し」といふ句を思ひ浮べ、この手記にも書きつけて置いたが、それから一月をけみした今日、あらためて花木の盛りを目にするにつけ、この詩句の実感がひしひしと身に迫るのを覚える。

荒廃は、人の心にある。今朝も、ある雑誌の人が来て、どうも此の頃は小説欄や詩の欄が見おとりがして困る、といふやうな話をして行つたが、わたしは、それは却つて正直さのあらはれで、寧ろ慶祝すべきではないかと答へて置いた。他の欄のものなら、論理や意志や政治的必要の力で、ともかくも擁護されてゐる。国際文化の屋根のもとに、楽々と風雪をしのぐこともあながち不可能事ではない。そこでは、筆者の裸か身は必ずしも必要でないのであるが（しかも、なんとそれが欲しいことであらう！）、詩や小説になると、何はともあれ生ける体感なくしては産まれない。それは、よしんば此の国に知性的な小説や詩の伝統があつたと仮定してみても、（思へば

悲しい仮定だが――）やはり同じことである。

今日の詩や小説の貧困は、そのままに彼らの光栄であるのかも知れない。……

心の支柱が見失はれると、わたしは鷗外全集を引き出して読む。この冷たい不思議な感性をもつた知性人は、その非情さ、その冷酷さによつて、その時として世の人にペダントと誤解されるほどの知的戯謔によつて、わたしを支柱も何も探ねやうのない冷徹な世界へ、つつ放してくれる。これがわたしのやうな弱い心にとつては、何よりの健康回復術である。今日は、荒廃といふ聯想に誘はれて、『普請中』といふ短篇を、まづ読み返してみた。

なにか建増しか改築か、そんなことで普請中の築地の精養軒で、ある日本の官吏が、留学中に関係のあつたと見えるドイツの歌姫と、夕食を共にする話である。女は演奏旅行の途中で、宿には伴奏者兼情夫役の、ポーランド名前をもつた男が残してある。

「……これからどうするのだ。」

「アメリカへ行くの。日本は駄目だつて、ウラヂオで聞いて来たのだから、当にはしなくつてよ。」

「それが好い。ロシヤの次はアメリカが好からう。日本はまだそんなに進んでゐないからなあ。日本はまだ普請中だ。」

二人はドイツ語で、そんな話をする。それから、どうせ燃えつきつこのない焼棒くりだと、一種捨鉢な安心のある一方には、優越感の張合ひのやうな気持もはたらく、ちよつと複雑な心理を背景にして、痴話めいた軽口を叩きながら食事をする。そして別れる。……それつきりのとりつく島もないやうな表情をした、冷たい小説である。それでゐて人物や環境が、くつきりと彫塑性を帯びて浮きだしてゐる。それは非情の余韻をひく。

この作品は、三田文学の明治四十三年六月号に載つた。その年の七月号には、ロダンの前で旅芸人の日本娘が着物を脱いでみせる話、あの裸体の形而上学ともいふべき透徹きはまる好短篇『花子』が……と考へてみると、昔はそのやうな雑誌もあつたのかと、夢のやうな心持がしないでもない。

普請中の食堂で、悠然と葉巻をくゆらしながら、昔の女と戯謔を弄してゐる鷗外、建てつけの悪い雰囲気のな

かで、美しい裸像をちょいと刻んでみせる鷗外は、強い精神の持主であつたと思ふ。わたしは巻をとぢて、普請……荒廃……普請……荒廃……と、あまり韻律美もないルフランをくり返してみる。……

某月某日

二三日前、めづらしく八幡通りの書店をのぞいて、荷風の随筆集『冬の蠅』が棚の片隅に残つてゐるのをふと目にして、購めて帰つた。昨夜はおそくまでそれを読んでゐるうちに、『里の今昔』と題する一文のなかに、「三四十年以前の東京にあつては、作者の情緒と現実の生活との間に、今日では想像のできない美妙なる調和があつた……」とある数行が目にとまつた。この調和がすなはち、一葉、柳浪、鏡花などの名作を成さしめたと云ふのである。鷗外が普請中と名づけた時代より、一時代前のはなしであるが、尤も鷗外のやうなきびしい眼の人に言はせれば、その時代も既に普請中であつたのかも知れない。不粋な金槌の音がわりあひ聞えなかつたのは、お江戸三百年ぐらゐなものであらうか。いかにも家康らしい手堅さで、あの普請はちょいと持ちがよかつた。……

それはさうとして、時代と人との間に、ともかくも成り立つてゐた——あるひは成り立たせ得た——調和から産まれ出たこれらの傑作も、少くもその帯びる美の性格が、すでに回顧美の領域に移り入りつつあつたことは、疑ひを存しないであらう。それは少くも、過ぎゆかうとする一時代の、やうやく紅をます残照の美に近いものであつたに違ひない。

美は、世にも敏感なものである。ほんのわづかな時間のずれが、たちまちにして美に腐敗を齎らす、頽廃をもたらす。時間のずれが大きくなつて、時代のずれにまで増大すると、美はすでに回顧美から頽廃美に移る。さらに時代が、急激な地すべりのやうなずれ方をすると、美は再転して荒廃美になる。そして人が、何かの原因によつて、時代の外に陥没すると、美は失はれて荒廃だけが残る。わたしどもは正に今その中にゐるのである。

わたしたちは詩に飢ゑてゐる。思へばそれは、美を見失つてゐるといふことであつた。ただ微妙な語感の上の

ニュアンスの差を除けば、それは同じことである。すなはち、美は寧ろ形態の美しさ、色彩の美しさを思はせて静態的であり、詩は主として精神の美しさ、特にその働きにおける美しさを想はせる。……

失はれた調和は、とり戻されなければならぬ。時代と人間との調和は、再び見出されなければならぬ。しかしこの失調回復は、もちろん口で言ふほど生易しいものではなささうである。新鮮美をいひ、健康な美をいふ前に、まづその新鮮さなり健康さなりが、精神のうちに肉体的に取戻されなければならないのである。一口にいへば、それは落着きの感じの回復であるが、内容的には少くもそれだけの必須条件を含んでゐるわけである。調和とは健康な現実感にほかならない。

それが第一段であるが、仮にこの条件が充たされたとして、その上に立つてもう少し入念に考察してみると、美なり詩なりといふものには、もう一つすこぶる微妙な、いはばわがままな性質があるやうだ。それらは、必ずしも直接に、新鮮とか清冽とかいつた境から、言ひかへれば時代と人間との過不及のない完全な合致から、乃至は人間の時代への一歩先行から、自然に湧き出して来るやうな天然物ではない。健康といふものが一脈のゆとりと成熟感とを内に含んでゐるのと同様に、美の時間的位相もやはり微妙なものがあり、それは或る程度の時間的なずれを、いはばわたしたちの精神の或る程度の爛熟を、要求しがちなものである。その爛熟は、もとより一面軽微な頽廃を含むものではあるが、また飽くまで清冽さを保ち、溌剌さを持つものでなくてはならない。その限りにおいて、そこには人工の忍び入るための微かな間隙が要求されるのだ。人間的になるための、いささかの余裕が要求されるのだ。この危機に、美は生まれ詩は息づく。

シャルドンヌは、随筆集『隣人愛』のなかで、やはりこのやうな美の消息に触れて、一つの挿話を引いてゐる。それは、ベートーヴェンの弾奏するのを聴きながら、ゲーテが涙をこぼしたといふ話である。「わたしは、あなたの気に入るために弾くのぢやない」と、この音楽家は言つたのだ。「この逸話は、おそらく作り話だらうが、それにしても美しい」と、シャルドンヌは附け加へてゐる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com